

ビール醸造の先覚者田中恒固氏

大字赤沼に「ビール屋さん」と呼ばれる家がある。当主は田中恒雄氏で養鶏業を経営している。

田中家は、ビールの外にこの地方での「田中枇杷^{びわ}」や廿世紀梨の栽培の先覚者でもある。先代の田中一雄氏は豊野村議会の議長、春日部市議、豊野農協組合長等をつとめている豊野地区の素封家である。何故に「ビール屋さん」と云われるようになったか、それは当主より四代前の恒固氏が、明治二十年頃この土地で「ビール」の醸造をはじめたのが由来であると云われている。

日本で「ビール」が醸造されたのは明治二年頃横浜で外国人が始めた「天沼麦酒」後にキリンビールに改められたと云われるのが最初のものである。明治九年には北海道開拓使によって札幌で造られた「札幌麦酒」後にサッポロビールと改められたと云われるものがあり、その外に明治初期には全国各地で小規模の醸造が行われていたようである。現在の大手メーカーの「ビール」は明治十七年から十九年にその基礎を固めている。しかしまだ日本人には、にがい飲物と云われてあまりなじめなかった「ビール」の時代であった。このような「ビール」の草分時代に、この片田舎の赤沼でビールを醸造した恒固氏は商品名を「マルコ麦酒」と銘打って開業

し、ラベルには軍刀を交差した下に「マルコ商会」と記し醸造所を「日本・武蔵・北葛飾」と横文字で表わし、カラー印刷で仕上られていた。

明治初期の文明開化の時代とはいっても、まだ濁酒から清酒にやっと移り変りはじめた時期であって「ビール」はどのような飲物であるかも知らない片田舎の赤沼で醸造されたとは想像も出来ない。

古老の話によると、発売開業祝をした時は、村中がお祭り騒ぎで露店が出る芝居はかかる花火は打上げられるで大変な賑いであったと云う。当時「ビール」と云わないで洋酒と呼んでいたそうである。開業祝の当日は大臣や県知事が金ピカの馬車に乗って来たとも云われている。村の人達は「ビール」とは、どのようなものであるかわからないで、開業祝で麦で作った飲物が御馳走になれると云うので、子供達までが田中家へ押かけ、「ギヤマン」のコップにコハク色の飲物を注いで飲んでいたという。まさかアルコール分が入っているとは思わなかったであろう。飲んだ人達は酔払って中には歩くこともおぼつかなく、はっていた人もいたと云われている。

マルコビールは業績を伸し後に「埼玉ビール」と改められて盛況を見た。その後アサヒ・サッポロ・エビス

の三社が合併して大日本麦酒を創立する際にこのビール商会にも合併の話を申込まれたが何故か賛成しなかった。その後大手のビールが市場を占有するようになったため販路も徐々に縮小されてついに廃業することになった。

創設者田中恒固翁は大正十年、七十六歳で他界された。当時清酒一升が十七銭、ビールが四合十一銭と高価であった。

※春日部市粕壁東三・二・十九 市史編さん室 (電話) 61 六四四二番 ※₁

初出「広報かすかべ 昭和五十六年三月」かすかべの歴史余話

※₁ 掲載当時のまま作成しました。市史編さん室は、春日部市教育センターで活動しております。(平成二十八年十月現在)